

< 実践事例 町田市立南第四小学校 >

1. 取組・活動名

「共生学習プログラム～おごり・こだわり・先入観なく～」

2. 取組・活動のねらい

- 運動を通じた「共感」⇒「共有」⇒「共生」の過程を経て、共生社会で生きる資質・態度を養う。
- 体育学習の中で、多様な個性をもつ友達との関わり方を学び、互いに支え合う存在であることに気付かせ、支え合う行動が高まることをねらいとする。

3. 教育課程上の教科名・時数

「体育、特別活動、学校行事・15時間程度」

4. 実施上の工夫

- ・体育では、「共感」「共有」「共生」の場面が期待できる単元を選定して実施する。
- ・特別活動では、通常学級の学校行事へ、特別支援学級児童が計画的に参加する。
- ・特別支援学級に在籍する児童を理解させるために、全通常学級に「特別支援学級障害理解教育」を行い、他者理解の基盤を育成する。
- ・特別支援学級の児童の状況に応じて、教科（単元）による交流学习を行う。
- ・スポーツの精神「みる」「する」「ささえる」を体育科授業の振り返り（シェアリング）項目に設定し、互いの学びを分かち合う態度を育成する。
- ・「共感」⇒「共有」⇒「共生」の学びのサイクルを単元指導計画に導入し、課題解決を図りながら、だれとでも協力していける態度を育成する。

5. 本取組・活動の内容



「全通常学級への特別支援学級障害理解教育の実施」

- ・特別支援学級の児童の「こまり感」を発達段階に応じて理解させる。
- ・「こまり感」は、だれにでも起こることを伝え、友達がこまった状況になった場合は、どのようにすればよいかを具体的に指導する。このことで、他者理解が深まり、だれとでも分かち合うことの大切さに気付いていく。



「学びを分かち合うシェアリング」

- ・シェアリングは「学習の振り返り」に相当する活動のことであり、活動して気付いたことや学んだことを友達と分かち合う（「共感」「共有」）ことを目的として行うため、「シェアリング」と名付けた。授業で「する」「みる」「ささえる」の三観点で行っている。
- ・シェアリングは特別支援学級でも同様に実施しており、特別支援学級の児童が通常学級の授業に参加してもとまどうことなく学習に参加できるようにしている。



「共感」⇒「共有」の段階を出現させるエブリバディ」

- ・単元を通して、2人組「エブリバディ」を設定する。よかったところを見つけ、相手に伝えることで互いに認め合う意識をもたせる。
- ・同じ場で固定したグループを作ることにより、共通する「こまり感」が出て、教え合いや伝え合いが活発になると考え、「共感」⇒「共有」を単元計画に設定する。



「共有⇒共生を出現させる交流学习」

- ・共感⇒共有の経験を土台として、交流学习を実施する。単元は、特別支援学級の児童と通常学級の児童が、相互に支え合い、高め合える教材を設定する。
- ・「5年生ボール運動（ソフトバレーボール）」では、ネット際でサーブを打つことを認めたり、練習で励まし合ったりする場面が表出した。

6. 成果

- ・全通常学級への特別支援学級障害理解教育が、共生学習プログラムの根幹であり、今後もさらに充実させ、継続して実施していく。
- ・課題を認識することで「共感」する態度が生まれ課題を解決していくことで「共有」する態度が育ち、さらに高め合っていくとすると共生社会への態度が育成されることが分かった。
- ・学校生活全般で、通常学級の児童と特別支援学級の児童が互いに支え合い、高め合う場面が増えた。
- ・単元計画に「共感」⇒「共有」⇒「共生」の段階を設定することで、期待する児童像を明確にし、具体的な指導方法を工夫・改善することができるようになってきた。